

地理学コース便り —1998年度—

◇文教育学部の改組に伴った、人文科学科（大学科）の中の地理学コース（大講座）が発足して、3年が経過しました。同時に、本年3月、旧・地理学科の最後の学生が卒業しました。したがって、現役学生の大多数は、入学時に人文科学科を選び、2年次の夏に学科内の4コースの中から、積極的に地理学を選択した人ばかりです。これまで以上に、卒論が楽しみです。一方、大学院（人間文化研究科）の改組も終了しました。博士前期課程では、地理学の助教授以上の教官（全8名）は、地理環境学コース（6名）と開発・ジェンダー論コース（2名）に参加しています。したがって、地理学関係の院生は、この2コースに在籍しています。本年3月には、それぞれのコースから1名ずつが修了しました（修論要旨参照）。また、博士後期課程では、教官は様々な専攻に参加することになりました。地理学のまとまりを持たせるため、学会報告レベルを想定した研究発表会（地理学セミナー）を定期的に開くなど、教官・院生が協力して、研究環境づくりに努めています。

◇教官、院生の異動を記します。まず、千歳教授が本年3月でご退官されました（本号巻頭参照）。後任に、大阪薫英女子短大から、石塚道子教授（政治・社会・文化地理学）を迎えました。石塚

教授は、カリブ海地域をフィールドに質の高い仕事をしています。次に、昨年4月、前（学部）助手の山田志乃布さんが、法政大学講師に栄転されました。その後任に、影山穂波さん（社会地理学）が着任しました。また、大学院助手に石川百合子さん（気候学）が着任しました。したがって、学内の地理学教官は10名在籍することになります。なお、大学院改組に伴い、本年4月より、内田（助教授）が大学院専任に移籍したことを付け加えておきます。

院生（M修了またはD在学）では、昨年4月に、佐藤由美子さんが日本女子大学（助手）に、中安直子さんと荒木志子さんが日本生態系協会に、上山亜紀子さんが東京都教育庁に、長尾朋子さんが東京女学館中・高に、武藤由紀子さんがジャパンシステムに、長尾洋子さんが一橋大学（助手）に就職されました。本年4月には、前屋敷史子さんが社会調査研究所に、浦場三砂緒さんが住宅都市整備公団に、浅野順さんがベネッセコーポレーションに就職されました。学部生の就職先等はニューズレターに掲載しますので、そちらをご覧ください。お茶大とはいえ、就職状況には厳しいものがあります。OGの皆様のバックアップ、よろしくお願いします。（内田）

地理学セミナー

- 6月22日
許 美淑「植民地時代における交通機関形成—主に京城における交通機関を中心に—」
- 9月2日
曹 賢美「在日韓国・朝鮮人の集住地域の形成と実態—神奈川県池上・桜本、戸手、寿の3地区を事例として—」
- 9月16日
森本 泉「「出稼ぎ」者の都市への適応—ネパール・カトマンドゥのガンダルバを事例に—」

- 石川百合子「降水中の非海塩性硫酸イオン濃度の算出に関する一考察」
- 11月11日
吉田道代「ベトナム難民女性の社会的統合とシチズンシップ—日本とオーストラリアの比較—」
- 内田忠賢「高度経済成長期とその直前における東京郊外の遊楽空間—谷津遊園と船橋ヘルスセンター—」

非常勤講師開講科目一覧

<専門>

自然地理学基礎演習

青木賢人 (東京学芸大学非常勤講師)

地形学

青木賢人 (東京学芸大学非常勤講師)

文化地理学

千田 稔 (国際日本文化研究センター教授)

地理学説史

源 昌久 (淑徳大学助教授)

日本地誌Ⅰ

谷川尚哉 (中央学院大学講師)

経済地理学

松橋公治 (明治大学教授)

外国地誌Ⅱ

永田淳嗣 (東京大学助教授)

<コア科目>

情報処理学

鳥田達巳 (東京都立科学技術大学教授)

地学

鳥海光弘 (東京大学教授)

社会情報処理演習

石崎研二 (東京都立大学助手)

社会情報学

田村紀雄 (東京経済大学教授)

国際社会論

首藤素子 (駒澤大学教授)

社会システム論

須田昌弥 (青山学院大学助教授)

現代社会分析Ⅱ

田原裕子 (東京大学助手)

プログラミング実習H

吉山 昭 (横浜国立大学非常勤講師)

<大学院博士前期課程>

(開発・ジェンダー論コース)

国際ジェンダー論

伊藤るり (一橋大学教授)

巡検記録

江戸・東京入門5	6月20日	内田
山形巡検	8月3～7日	杉谷・水野

山形盆地の変動地形	8月7～8日	杉谷
北総の街を訪ねる (野田, 柏)	9月20日	内田
川崎市の中心と臨海	10月28日	千歳
歴史を歩く, 街を学ぶ (佐倉)	12月6日	内田
微気象観測 (高尾山)	1月5～6日	田宮
相模原巡検	1月22日	水野
世界都市東京を歩く	2月15日	内田

山形巡検報告
松島誓子・萩原隆子

[金山町] 私たち金山班は、研究の対象別に林業、町並み保存、観光と3グループに分かれ、それぞれに理解を深めました。まず、杉の産地である金山町の林業の存続・発展のための森林組合、山林所有者、行政の3つの立場からの取り組みの様子と、実際の山林での作業とその問題点を、林業グループは調査しました。次に、町並み保存グループは、建物の分布状況の調査を中心に、行政と住民が協力しあった景観美化的ための努力を研究しました。そして、観光グループは、新しい観光のかたちに挑戦している姿を学びました。ホテル建設を契機に、観光資源の少ない町という弱点を逆手に取り、地元の人をインストラクターにして金山の自然を体験してもらおうという「人との交流」を目指しています。この「大巡検」で、ひとつのテーマについて突き詰めて考えることや、実際の調査の手順・方法を身をもって体験することができました。この経験を4年次での卒論に生かそうと考えています。(松島)

[長井市] 私たちは、長井市のレインボープランについて調査・研究を行いました。レインボープランとは、地域内循環型農業のことです。つまり、各家庭から出る生ゴミを再利用して堆肥を作り、それを使って作られた農産物を市内で消費しようという試みです。行政と生産者と消費者が一体となって、推し進めているプランの実態を、聞き取りを中心に調べました。レインボープランの中心的な推進者である行政、実際に堆肥を使っている生産者、出来た農産物を取り扱っている流通業者、プランに関与していない農業従事者、JAなど、様々な立場の人に、あらゆる側面から話をお聞き

できたことは、たいへん興味深いことでした。また、時には、言葉が聞き取れなかったり、話が横道に逸れて肝心なことを聞きそびれたり、調査の楽しさと難しさも痛感しました。巡検を通してしか得られない貴重な体験は、忘れられない思い出となりました。それを、卒論に生かしていきたいと思います。(萩原)

教員スタッフの活動

(締切日までに原稿が到着したもののみ掲載)

田宮兵衛

昨年に引き続き作文の記録を作成した。昨年は附属中学校創立50周年だったので、校長としての作文量は多かったが、今年はこの原稿の締切が早まったこともあり作文量は少ない。なお、題名が「挨拶」等の場合は無題とした。

凡例：①題名，②掲載誌名（巻号），発行者，頁，③発行年月日

- ①『「総合的な学習の時間」(仮称)』と地理学教育，②お茶の水地理，第39号，45-50，③1998.6.30.
- ①まえがき，②研究紀要（第27集），お茶の水女子大学附属中学校，1-2，③1998.7.1.
- ①修学旅行の些細な感想，②お茶の水中学PTAだより，第83号，お茶の水女子大学附属中学校PTA会長，1-2，③1998.7.10.
- ①無題，②鏡水会だより [年報]，第2号，鏡水会，1，③1998.7.10.
- ①生徒祭によせて，②お茶中生徒祭パンフレット，お茶の水女子大学附属中学校，2，③1998.9.26.
- ①まえがき，②平成10年度教育研究協議会研究紀要“児童・生徒が自分にとって「意味ある学びを」創出する”教育課程の開発（第2年次）—学習内容・方法における小中連携と中学校における履修方法の改善を通して—，お茶の水女子大学附属中学校，3，③1998.10.30.
- ①まえがき，②第4回育研究協議会研究紀要『帰国生はこうして学ぶ』—在外学習歴を生かした学習指導のあり方—，お茶の水女子大学附属中学校，3，③1998.11.6.
- ①暗記について，②お茶の水，第50号，お茶

の水女子大学附属中学校生徒会，4-6，③1999.3.17.

- ①思い出様々，②お茶の水中学PTAだより，第84号，お茶の水女子大学附属中学校PTA，1，③1999.3.10.

熊谷圭知

[編著書]

熊谷圭知編『第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新』文部省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書，170p. [1999年3月]

[論文]

Japanese Geographers and Their Studies on the Third World after the Second World War : A Critical Review, *Geographical Review of Japan* Vol.71 (Ser.B), No.1, 1-30. [1998年8月]

「第三世界の地域像と地誌記述の革新」熊谷編（1999）：pp.3-10.

「地域研究とフィールドワーク：私のパプアニューギニア調査研究の反省的考察を通じて」熊谷編（1999）：pp.159-170.

「近年のポートモレスビーにおける都市移住者の生活様式と首都空間の変容」塩田光喜編『太平洋島嶼国の都市化』アジア経済研究所，pp.17-42. [1999年3月]

[編集]

太田 勇『華人社会研究の視点——マレーシア・シンガポールの社会地理——』古今書院 [1998年5月]（寄藤昂・堀江俊一・太田陽子との共編）

[翻訳]

「シンガポールは第三世界の都市か？」太田勇（1998）：pp.172-198.（原著：Is Singapore a Third World City? In Koga, M. ed. *Some Aspects of the Urbanization in Developing Countries*: Tokyo: Hitotsubashi Univ. 1985)

[解題]

「第Ⅱ部 都市国家シンガポールと華語社会の変容」太田勇（1998）：pp.167-171.

[その他]

1. 文献紹介

『地理学を学ぶ』（竹内啓一・正井泰夫編，古今書院，1986年），『日本風景論』（志賀重昂著，講談社学術文庫，1976年），『野外科学の方法』（川喜田二郎著，中公新書，1973年），『都市と

社会的不平等』(ダヴィド・ハーヴェイ著, 日本ブリタニカ, 1980年), 『風土の日本——自然と文化の通態——』(オギュスタン・ベルク著, 筑摩書房, 1988年), 『オリエンタリズム』(E. サイド著, 平凡社, 1986年), 『都市の空間と時間——生活活動の時間地理学——』(荒井良雄・岡本耕平・神谷浩夫・川口太郎著, 古今書院, 1996年), 『空間から場所へ——地理学的想像力の探求——』(大城直樹・荒山正彦編, 古今書院, 1998年), 『スリランカ・ゴールの肖像——南アジア地方都市の社会史——』(友杉孝著, 同文館, 1990年), 『カリブ海世界』(石塚道子編, 世界思想社, 1991年), 『ノーマネー・ノーハネー: ジャカルタの女露天商と売春婦たち』(アリソン・マレー著, 木犀社, 1994年)

以上, 「地理学を楽しむための50冊」, アエラムック『地理学がわかる』朝日新聞社, [1999年4月]所収.

2. 用語解説

「風土」, 「インナーシティ」, 「国民国家と地理学」, 「国際人口移動」, 「建造環境 (built environment)」, 「地域開発」, 「地政学」, 「地域主義」, 「植民地と地理学」, 「フェミニスト地理学」, 「フィールドワーク」, 「地誌」

以上, 「地理学がよくわかるキーワード50」, アエラムック『地理学がわかる』朝日新聞社, [1999年4月]所収.

[口頭発表]

「都市美化」か, 「都市の農村化」か? ——ポートモレスビーにおける都市空間の変容と都市移住者の生存戦略——。アジア経済研究所「太平洋島嶼国の都市化」共同研究会 [1998年10月24日, アジア経済研究所]

新たな地誌記述の方法のための覚え書き——「多声的 (multi-vocal)」地誌に向けて——。文部省科学研究費「第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新」共同研究会 (研究代表者: 熊谷圭知) [1998年12月5日, 博多第一ホテル]

第三世界の地域像と地誌記述の革新。日本地理学会シンポジウム「第三世界の地域像と地誌記述の革新」[1999年3月27日, 専修大学]

[新聞記事による研究紹介] *

Wenceslaus Magun 'Gavman i gat wok bilong lukautim ol setelmen' (政府は [移住者] 集落の

面倒を見るべきだ), Wantok紙 (パプアニューギニアの週刊ピジン語新聞) 1998年8月20日付, p.18

Wenceslaus Magun 'Government challenged to look after squatters' (政府は不法居住者 [集落] の面倒を見るべきことが問われている), Independent紙 (パプアニューギニアの週刊英字新聞) 1998年8月21日付, p.7

*いずれも, 熊谷が1979年以来これまでポートモレスビーの移住者集落で行なってきた調査研究の経緯, および, そこで得た知見 (移住者集落と住民の生活の実態・農村から都市への移住の背景に存在する要因…等々), 政府の政策に対する批判と提言, について, インタビューをもとに, 1頁全面を使って紹介した記者の署名入り記事。

水野 勲

[学術論文]

"A regional disequilibrium theory of competitive and cooperative central place systems." Doctoral Dissertation, Faculty of Science, Tokyo Metropolitan University, 1998.

「地域の経験的規則性と固有性の緊張関係: 計量地理学による韓国研究の事例を通して」. お茶の水地理39, pp. 1-12, 1998.

「アジア各国の都市システムの変動」. 松原宏編『アジアの都市システム』九州大学出版会, pp.63-94, 1998.

[口頭発表]

「数理地理学の方法: アラン・ウイソン氏のモデル・アナロジー・レトリック」. 日本地理学会「地理学の伝統と革新」研究グループ例会, お茶の水女子大学, 1998年3月.

内田 忠賢

[書いたもの] (1998年4月~1999年3月に活字になった分)

1. 「ムラの空間構成 (3) : 高松平野新川・吉田川中流域の民俗的ランドマーク調査」『弘福寺領讃岐国山田郡田岡関係遺跡発掘調査概報Ⅲ』高松市教育委員会, 1998年3月
2. 「よさこい祭り的人类学」『三色旗』601号, 慶応義塾大学, 1998年4月
3. 「小宇宙としての大都市江戸: その生活空間と行動文化」『国際シンポジウム 新・都市の時

- 代：成熟都市のシナリオ』千里文化財団，1998年9月
4. 「大久保・藤崎地区」『平成10年度習志野市民俗資料調査報告書』習志野市教育委員会，1999年3月
 5. 「“娯楽の殿堂”の軌跡：高度経済成長期における東京郊外の遊楽空間」成田孝三（編）『大都市圏研究（下）』大明堂，1999年3月
 6. 「地理学がよくわかるキーワード50」『AERAムック：地理学がわかる』朝日新聞社，1999年4月
 7. 「地理学を楽しむための50冊」『AERAムック：地理学がわかる』朝日新聞社，1999年4月 [話したこと] (1998年度)
1. 「都市の新しい祭り」と民俗学：高知「よさこい祭り」を手掛かりに」日本民俗学会年会第50回記念シンポジウム，1998年10月（仏教大学）
 2. 「高度経済成長期とその直前における東京郊外の遊楽空間：谷津遊園と船橋ヘルスセンター」1998年度人文地理学会大会（一般発表），1998年11月（京都大学）
 3. 「都市祝祭と都市社会のゆくえ：高知「よさこい祭り」」新・四国平成義塾98／踊りから躍りへ：踊りからみる四国未来像（四国4新聞社主催シンポジウム），1998年11月（徳島プリンスホテル）
 4. 「レジャーランドの物語」現代風俗研究会東京の会例会，1998年12月（日本女子大学）

影山穂波

[論文]

- 「ジェンダーの視点から見た港北ニュータウンにおける居住空間の形成」地理学評論，71，pp. 639-660，1998.
- 「地域活動にみるジェンダー構造：港北ニュータウンの事例から」地理43（12），pp.47-53，1998.

石川百合子

[学術論文]

1. Yuriko Ishikawa, Kenichiro Yoshimura, Atsuko Mori and Hiroshi Hara (1998) : High sulfate and nitrate concentrations in precipitation at Nagasaki impacted by long-distant and local sources, *Atmospheric Environment*, 32, 2939-2945.

2. 石川百合子，大野卓也，大山準一，小川完，原宏（1998）：綾里における1976～1994年の降水の酸性化，*天気*，45，351－360.

[口頭発表]

1. 石川百合子：1913年から1940年の西ヶ原における酸性雨成分の湿性沈着量の推定，日本地理学会春季学術大会，東京，1998年3月。
2. 石川百合子：降水中の非海塩性硫酸イオン濃度の算出に関する一考察，日本地理学会秋季学術大会，札幌，1998年9月。
3. 石川百合子：西ヶ原農事試験場における1913－1940年の降水分析データから推定した酸性雨成分の湿性沈着量について，気象談話会，つくば，1998年11月。

編集後記

◇お茶の水地理学会の主要なメンバーは、地理学科OGです。彼女たちの多くは、研究以外の場で活躍しています。その読者に向かって、学術論文がメインとなる『お茶の水地理』を発信することに、私は抵抗があります。OGの手（編集）による、年1回の同窓会雑誌（文集）にリニューアルしたほうが良いのではないかと考えます。

◇にもかかわらず、従来の路線で本号を作ることができました。「年1回、学術論文を読むのも楽しいものよ」と励まして下さるOGや、力作を寄稿して下さった方のお陰です。

◇本号は、千歳教授のご退官記念号であると同時に、第40号という節目の会誌です。『お茶の水地理』の将来に、OGの皆さんにも積極的に関わっていただきたいと思います。

◇なお、学会がきわめて厳しい財政状況にあるため、編集方針を変えました。ひとつは、編集（一部）・印刷を開成出版という出版社に委託し、効率の良い雑誌作りを試みました。もうひとつは、FD（フロッピーディスク）での入稿を原則としたことです。これらにより、コストをできるだけ押さえ、合理的な編集ができたと自負しています。ご無理をお願いした執筆者と開成出版編集部の黒田武さんに、心からお礼申し上げます。（内田）

本号編集：内田忠賢・水野勲